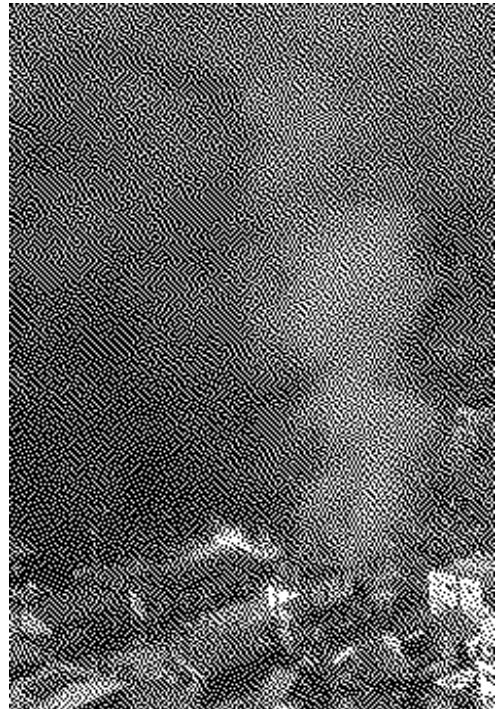


# 震災の爪跡 その1 2年4組学級通信 第6号 1996.4.25

あの1月17日を、君たちはどう記憶しているでしょうか。

私の場合はこんなふうです。その数日前からJさんとYが風邪をひいて、3人で一階で寝ていました。地震が起こるちょっと前、何となく目が覚めてボーとしていました。すると、いきなりガガガという音とともに、ものすごい縦揺れがおこり、続いてユッサユッサともものすごい横揺れがはじまりました。なにしろ築百年の家です。あちこちがギシギシ音を立てます。絶対この家は倒れると思いました。とにかくYを守らねば思い横を見ると、すでにJさんがかぶさっていました。ひょいと別のところを見ると、そのものすごい揺れのなかで、ストーブがつきっぱなしです。ストーブに飛びつくようにして火を消しました。揺れがおさまってすぐテレビのスイッチを入れ、情報を仕入れました。NHK神戸放送局の状態を見て、放送部の部室のことが心配になりました。学校の行きもテレビのスイッチを入れっぱなしにしていました。このあたりになり、ようやく長田区で火災が発生していることがわかったように思います。

震災があったのは、たしか火曜日でした。次の日曜日、西宮にボランティアに行く機会がありました。西宮北口の駅をおりたときの第一印象は、「結構すごいけど、意外と大したことない」でした。しかし、国道2号線を歩きはじめると「イズミヤ」の3階はペしゃんこ、商店街はぐしゃぐしゃ、電柱は傾き、家はひっくり返り、無事そうに見えるビルも実は隣のビルや電柱にもたれているというありさまでした。ヘリがひっきりなしに上空を飛び、サイレンを鳴らしながらしずしずと走る黒塗りの車の列、あの風景をいまでも忘れられません。



## ○阪神大震災の被害をどう考えるか

地震は防ぐことはできません。また、予知することも大変難しいものです。そういう意味では、「阪神・淡路大地震」は「天災」と言えるかもしれませんが、6千名以上もの犠牲者は、本当に天の力のみにより亡くなったのでしょうか。

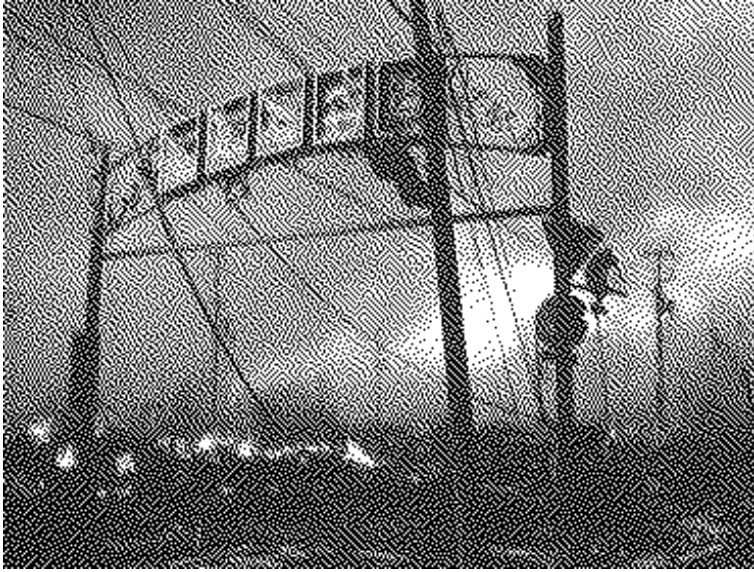
死者のうち88%は倒壊家屋による「圧死」だったといえます。ところで、生活保護を受けていた人の死亡率は、全住民の死亡率の5倍だったともいえます。倒壊家屋の一番の原因は「古い家」であるといわれます。そのことと、これらのことの間には、何も関係がな

(写真①)

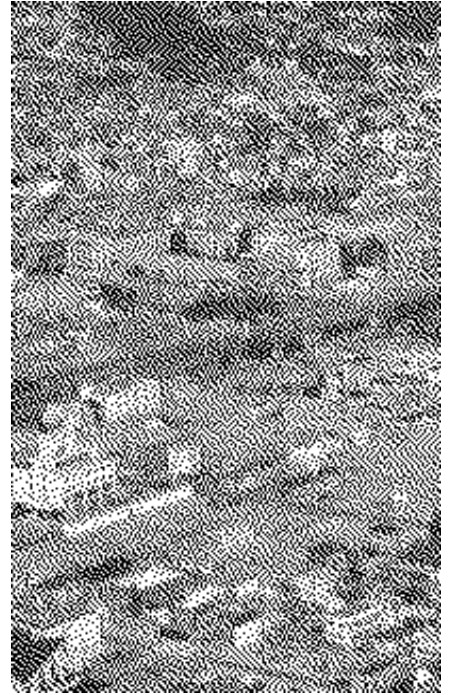
いといえるでしょうか。また、全壊・半壊・焼失により家がなくなり、「避難所」「待避所」すら追い出され、「仮設住宅」にも入れずに、いまだに「家」で住むことのできない人もたくさんいます。これらの人々も、天の力のみにより住む家を奪われたのでしょうか。

#### ○長田区について

長田区では、大火災が起きました。今回の震災の全焼失家屋のうち、半数以上が長田区の家なのです。今回行く鷹取駅周辺も、大火災の起こったところです（写真①）。いまは火災のあったところは更地になっています（写真②）。しかし、駅の近くの鷹取商店街には、いま



（写真③）

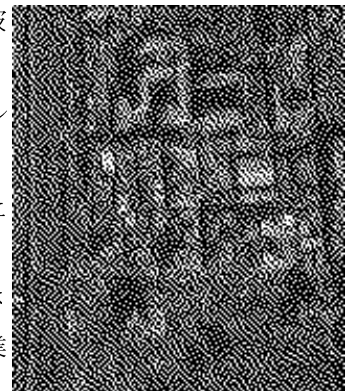


（写真②）

だに焼けこげた看板や電柱があり、そのものすごさを物語っています（写真③）。また、倒壊家屋につ

いても、神戸市のなかの約30%が長田区です。なぜこれほどの被害が長田区に集中したのでしょうか（写真④）。

震災後、何度か報道されたと思いますが、長田区は「ケミカルシューズ」産業の町です。君たちが知っている「おしゃれな町・神戸」とは全然違う風景が長田です。ここには「おいしそうなたべものの臭い」や「心地よい音楽」はありません。そのかわり、ケミカルシューズ工場独特の臭いと機械の動く音がします。まさに働くオッチャン・オバチャンの町なのです。そして、この産業を支えてきたのは、厳しい差別にさらされてきた在日朝鮮人の人々をはじめとする在日外国人の人々なのです。



（写真④）

現在日本の人口の約0.5%の人々が、韓国・朝鮮籍であるといわれています。その比率でいうならば、全死者6000人に対して在日朝鮮人の人の死亡者数は30人程度のはずです。ところが、実際には100人以上の人が亡くなっているのです。実に、日本人の約三倍の死亡率なのです。これはいったいどういうことなのでしょうか。

## ○鷹取教会について

鷹取教会はカトリックの教会です。今回の震災で、礼拝堂は全壊し、かろうじてイエス像だけが残りました（写真⑤）。現在、ここは教会としてだけではなく、「兵庫県定住外国人生活復興センター」の事務所として活動をしています。どういう活動をしているかという紹介のため「開設にあたって」から、一部引用をすることにします。

「戦後最大となった阪神・淡路大震災は、多くの命を奪い、街を廃墟に変えました。被害は特に高齢者、障害者、低所得者という社会的弱者に集中しており、天災もまた平等でないことを明らかにしています。在日韓国・朝鮮人の多住地域、神戸市の長田区に見られる火災の惨状は、日本社会の矛盾を押しつけられてきた外国人住民の実体を表しており、いままでの社会、街のあり方が問われています。日本社会のなかで、厳しい偏見や無理解にさらされながら町の発展を底辺で支えてきた外国人住民が、街の復興において、就職、



（写真⑤）

入居などの生活再建の場で差別にさらされ取り残されることがあってはならないはずです。

（中略）街の復興に外国人住民の声が反映し、再建される街に「ワールドタウン」「コリアアストリート」「ベトナムストリート」といった「夢のある街づくり」につながっていければと思います。（後略）」とあります。ここにあるように、このあたりには多くの在日朝鮮人や、在日ベトナム人が住んでいます。その人たちのために、「FMわいわい」という放送局を開設し、朝鮮語やベトナム語の放送をしています。また、未払い賃金の問題・仮設住宅づくり・公団住宅入居の相談などその活動は多岐にわたっています。

## ○南京町から三宮について

元町から三宮のあたりも、大きな被害のあったところです。

君たちが楽しみにしている南京町も、「兵馬俑」といわれる大きな石像が倒れたことが報道されました（写真⑥）。

しかし、「南京町」は復興が最も早かった街のうちのひとつとしても有名です。こわれた瓦礫を整理し、屋台を出して、いち早く営業をはじめたこともまた大きく報道されました。被災の街神戸に、もっとも不足していたものは、温かい食べ物と温かい飲み物でした。南京町の復活により、そうしたものがようやく人々のものに戻ってきたのです（写真⑦）。



（写真⑥）

しかし、なぜ南京町の復興が早かったのでしょうか。

一般には、「中国人パワー」などといわれていたようにも思いますが、私が想像するには、おそらく「はじめから救援などあてにしていなかった」のではないかと思います。敗戦の瓦礫のなかから立ちあがったとき、南京町の人たちは、厳しい差別の社会のなかで、

中国人同士で協力しあい、「南京町」をつくってきたのだと思います。今回の震災の瓦礫のなかからの立ちあがりのときも、その時の経験から、「日本人の援助」など考えずに、自らの手で復興をはかったのではないかと思います。

しかし、南京町も一步裏通りに入ってみてください。実は、あちこちにまだまだ震災の爪跡が残っています。たとえば、傾いて立入禁止になっているビル、あるいはトタンで区切ってある更地、実は華やかに見える表通りだけが南京町でないことが、よくわかると思います。

三宮のビルも被害にあい、現在建て替えていることは君たちも知っていることと思います（写真⑦）。三宮には、私も知っているところがあります。現在そのビルは使えるようになっており、見た目には震災前と変わらないようになっていました。しかし、そのためには莫大な費用がかかったということです。あまり大きくないビルですらこれです。ひとつの街の復興のために、どれほどのお金がいるかということに改めて感じました。

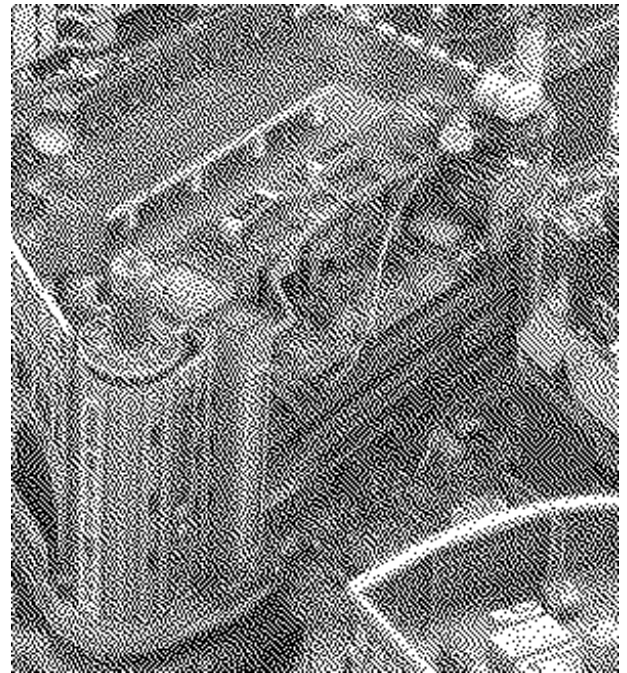
去年の秋頃、会議で三宮に行く機会がありました。このころには、町並みはほとんど震災前と同じような感じでした。もちろんたくさんの建設中のビルはあります。しかし、表向きは街は動きはじめているように見えました。

ところが夜になり、帰ろうと思い、駅の裏道のあたりを通ると、ちょっと変な感じなのです。開いている店は「風俗」関係の店ばかりです。安そうな飲み屋やスナックは、閉まったままです。いっしょに歩いていた兵庫の人は「最初に開いたのは、高そうな店や。安い店は、結局まだ開かへん。結局金持ちから復興していくんや」と言っていました。

このことは、兵庫全体についても言えることです。現在震災についての報道はほとんどされていません。「避難所」の「待機所」と名前を変えさせられ、いかにも完全復興が近そうな感じですが、しかし、本当にそうなののでしょうか。今回の遠足のなかで、自分自身で感じてほしいと思います。



（写真⑦）



（写真⑧）